

「女の決闘」三人の著作の比較と検討

(Comparisons and further exploration of three works of “Ein Frauenzweikampf”)

芝浦工業大学柏高等学校 1年5組 布施慶多

Abstract: „Ein Frauenzweikampf” (A duel of two women) was ordinally written by German playwright Herbert Eulenberg (1876-1949), translated in Japanese by Ogai Mori, and finally parodied by Osamu Dazai in 1940. Thus, these works have far different background. In this research, compares and analyses these three works by citing “Psychologie und Dichtung” by C.G. Jung, “The Tacit Dimension” by Michael Polanyi and subtexts behind these works. Finally, declares how texts has transformed.

Keywords: Tacit Dimension, Psychological literature, Non-Psychological literature, Character name, Ogai Mori

1. 研究背景

『女の決闘』(Ein Frauenzweikampf)とは、ドイツの作家、Max Herbert Eulenberg (マックス・ヘルベルト・オイレンベルグ)の „Sonderbare Geschichten” という短編集の中に収められた小説である日本では森鷗外が原作出版直後にそれを翻訳し、その30年ほど後に、鷗外の訳文を土台にして、太宰治が小説「女の決闘」をパロディ化してリライトした。原作は、1911年、Leipzig „Ernst Rowohlt Verlag “1出版の作品集,”で発表された。鷗外作品は原文にある程度忠実な翻訳を試みているのに対して、太宰作品では、例えば原作や鷗外訳には登場しない「亭主=オイレンベルク」という人物を新たに登場させるなどしている。その理由について、太宰のテキスト分析をした論文の多くは、太宰自身が作中で述べている「構成が投げやりに感じられたからだ」²という記述を元に説明しているが、作者の意図が作品にそのまま反映されることを自明としてよいのかという疑問が残る。そこで、原文及び鷗外訳、太宰作品のテキスト及びサブテキストをより丁寧に分析することで、太宰自身の意図を越えたところで原作が改変されていった過程を明らかにできると考えられる。

2. 研究目的

本研究の目的は、太宰治『女の決闘』における原作からの加筆・改変部分が、なぜ生じたのかについて明らかにすることである。その際に、3作品をそれぞれ精読したうえで、作者の生い立ち等も含めて、ユング心理学やポラニーの「暗黙知」という概念を用いながら考察することで、太宰の「創造」が太宰自身の意図を越えた形でなされたものであったことを示したい。

3. 研究方法

1. ヘルベルト・オイレンベルクの独語原作版 „Ein Frauenzweikampf”、森鷗外の日本語版『女の決闘』、太宰治のパロディである「女の決闘」の3つの作品を比較するに当たって、それぞれのテキストを精読する。
2. 三人の筆者の生い立ちや、作品を作った背景や意図などのサブテキスト分析。
3. ユング心理学 (Psychologie und Dichtung) 及び、ポラニーの「暗黙知」(The Tacit Dimension)の枠組みを用いた分析。

4. 結果・考察

1. テキスト分析

まず、この作品が入っている作品集 „Sonderbare Geschichten “の名称についてである。1980年岩波書店発行の「鷗外選集 第十七巻」の巻末にある「解説」では、小堀桂一郎氏により「綺譚集」³と訳されているが、鷗外が翻訳した当時1911年の「辞林」、1969年の「広辞苑 第二版」にも、同語の掲載はない。⁴2018年発行の「広辞苑 第七版」には、漢字こそ違うが、「奇譚」という言葉が「世にも珍しく面白い物語・言い伝え。」⁶という意味で記載されており、原題の直訳(Literal Translation)⁷に近いが、鷗外選集に記載されている「綺譚」の「綺」は、変であることを意味する「奇」とは違い、美しいことや魅了するものという意味があるということに留意したい。

続いて、この作品に登場する登場人物の名称についてである。オイレンベルグの原作では、鷗外訳で「女学生」に当たる人物が、決闘の前の場面までは „Studentin (女性の大学生) “、決闘の場面に於いては二度とも „Russin “ (ロシア人女性) と呼ばれており、決戦を境にして使い分けられていることがわかる。

2. 三人の筆者の生い立ちや、作品を作った背景や意図などのサブテキスト分析

原作者であるヘルベルト・オイレンベルグ (1876—1949) はナチス政権が台頭する前のドイツではとても有名な作家、ヒューマニストであった。当時、特に彼の劇作のドイツ語圏での評価は高く、ほかにも、米国のコロンビア大学において、アインシュタイン以降ドイツ人として二度目の登壇などを果たしている。しかし、戦中は、ナチスに「平和主義者」として著書の多くが出版制限され、禁書となっていた⁸こともあり、今日のドイツではすでに絶版となっているため、今日は無名となってしまっている。日本では森鷗外によって、当短編集から、当作と「塔の上の鶏」が翻訳された以外は、ほとんど知られていない。なお、彼の出身地であるラインラントでは、今日においても知名度が高いようである。

翻訳者の森鷗外は、当作品を翻訳するだいぶ前ではあるが、ドイツに医学のために四年間、国費留学をして、ドイツ人女性と交際していた⁹という記録から、ドイツの社会、言語、論理、心情、女性観について理解があったと考えられる。彼は、往年の生活を日本のエリートとしても過ごした生粋の「日本人」でもある。鷗外の翻訳法は、Schreiber の定義するところの Übersetzung (翻訳)ではなく、Interlinguale Bearbeitung (多言語間テキスト変換)¹⁰に相当するので、「意味空間」を眺めて、それを自分の言葉で書いていると説明できる。¹¹そのため、外国語に隠された「暗黙知」的な意味まで「意味空間」に持ち込み、それを日本語に落とそうとしたのではないかと考えられる。それに対して、太宰治は、フランス語、英語を学んだ記録が残っているが、ドイツ語を学習した経験は無いと思われる。留学経験もなく、翻訳小説の出版記録もない彼は、「純日本的価値観の持ち主」だと言える。したがって、彼が問う作品をパロディ化する際に参考にしたのは、鷗外訳のみであったと推測できる。

3. ユング心理学及び、ポラニーの「暗黙知」の枠組みを用いた分析

まずは、この物語の構成についてである。ユングの „Psychologie und Dichtung “に書かれている「心理小説」と「非心理小説」という枠組みを用いて分析すると、この小説は、以下の表にあるように決闘の場面に境に前後に分けることができる。

	描写	ユングによる分類	心理学的な解釈の余地	備考
前半	写実のみ	非心理小説	有り	読者に「幻視の体験」を与えるファンタジー小説
後半	宗教的でヒステリック	心理小説	無し	創造の余地を与えない

121314

読者が、後半の宗教的、ヒステリックな心理的描写、つまり想像の余地を与えない、「人間経験の領域にある強烈な体験 (Bereiche menschlicher Erfahrung)」¹⁵を、前半で脳内に創り上げた想像を土台にして読むことにより、物語全体が読者周辺の日常から乖離し、この物語は非日常的な「綺譚」といえるものとなるのである。

次に、1で指摘した登場人物名についてだ。この作品の中では、二人の登場人物の呼称が数回変わるが、私はこれに対し、ポラニーの「暗黙知」に定義される「言葉の意味」を読者心理に反映させるための明確な意図があると考える。¹⁶

	日本語での概訳	ドイツでの暗黙知	日本での暗黙知
Russin	ロシア人女性	敵国の女性・悪者	左に同じ
Studentin	女性の大学生	一握りの優秀な女性	上品・優秀
Weib	「女」	単なる「女性」	普通

オイレンベルクは、「女学生」の呼称に、ビスマルク退任後のドイツにおいて、「敵」などマイナスな暗黙知を持つ „Russin “(ロシア人女性)¹⁷という言葉、ドイツで

教育制度の関係上今日でもとても優秀な暗黙知を持つ言葉である „Studentin “(女性の大学生)という言葉の代わりに用いることによって、彼女に対して「悪者」のイメージを与えている。決闘で死んだ後は、単純に「女」と言われている。コンスタンチェに関しては、ほとんど最後まで „Constanze “と登場するたびに名前が書かれているため、読者の中で彼女の存在感は大きい。結果、最初はコンスタンチェより上品に描かれていた女学生だが、決闘の場面で「敵」「悪者」である「ロシア人女性」とされ、死後はただの「女」(Weib)となるため、女学生の役柄は最後、とても蔑まれたものとなっている。決闘で「悪者」の「ロシア人女性」を殺し、存在感のあるコンスタンチェは相対的に持ち上げられる。 „Ein Frauenzweikampf “ではこのようにしてコンスタンチェが美化され、更に先述の二部構造が招く「物語の読者の日常からの乖離」と合わせて、物語全体を「綺譚」化しているのだ。

最後に、鷗外訳を、ポラニーの暗黙知を用いて、分析する。前述の通り、鷗外の訳法は、独文に含まれる「暗黙知」を内包して和文に訳せるものだが、本作品中には「原文の意図」を欠いてしまっている部分もある。前述の通り原作では、個人名で登場するはずのコンスタンチェは、当時の日本の女性観そのものであり、亭主の従属物である「女房」へ、当時の日本においてもマイナスな暗黙知を含む「ロシア人女性」は全て日本においても高貴な意味を持つ「女学生」へと翻訳の過程で呼称が統一されている。しかし、決闘場面に女学生が発した „Gut! “(英語の “Good! “に相当)を「ようございます。」と訳しているところからも、鷗外は、意図的に女学生を高貴に見せたかったのかもしれないということが読み取れる。また、原作者の意図に関わる登場人物名を、無意識に上記のように「非ドイツ的」に(つまり日本的)書き出した理由としては、留学してから時間が経ち、「ドイツ」と強く結びついた情愛の過去を封じたいという思い¹⁸から、「ドイツ的思考」を「無意識」のうちに忘却の彼方に追いやってしまった可能性があり、ユングの言う、「非心理的小説には、恋愛体験などの詩人の無意識に収めようとする「問題の出来事」が造形されて表に出る²⁰」という枠組みで説明する事ができる。

まとめ

女の決闘(太宰)は原作とは大きく異なるが、これには鷗外の訳文と、物語の前半における非心理的記述両方に起因する太宰の解釈がある。ユングによると、幻視的素材(=非心理小説)中の出来事を原作者の個人的体験だと考えることは至って正しく、自然なことのようにである²¹。また、鷗外訳に原文通り、コンスタンチェが「女房」でなく毎回個人名で登場しているのであれば、それは独立した一人の女性だが、鷗外訳の「女房」では、必然的に「亭主」の存在が浮かび上がる。そうした点から、太宰の物語中に「亭主」のオイレンベルグが登場する理由に説明がつく。「女の決闘」(太宰)では、原作のパロディ化の過程で、鷗外訳に起因する創造と、ユングの論における心理学的「正解」が一人称の「亭主=オイレンベルグ」として全て読者に与えられているため、本来写実的な冒頭場面を読んだ読者がするはずの「創造」がなくなり、原作の後半における心理的描写の「綺譚性」が失われ、「奇譚」なものとなっている。それは、読者を太宰治の「心理的小説」の世界に縛り付けていると言える。

5. 結論及び今後の展開

本稿により、太宰治「女の決闘」に於いての加筆部分における彼自身の「創造」が、独文原文の書き方と鷗外訳文の表現に起因することが明らかとなった。彼の心理的小説にある記述法は、いわば太宰がユングの心理学的論述通りに、非心理小説である鷗外訳文前半に対しての「創造」を自身のパロディに書いているという点で、彼は既に非心理的小説の「心理学的正解」を記述していることになる。これによって、彼が「素材」である写実を以て書く心理的小説とは、非心理小説によって生み出された創造である「心理学的正解」だという読み方もできる、ということが証明される。今後は、「女の決闘」と同様に、太宰の翻訳文学のリライトである「走れメロス」などを研究し、さらに裏打ちのある議論を展開していきたい。

参考文献・引用文献(Footnotes)

¹ Universität Leipzig: Kurzbiographie Kurt Wolff, URL:https://home.uni-leipzig.de/buchwissenschaft/kurtwolff/?page_id=22 (abgerufen am 13.09.2021)

² 大國真希 (2006) 「太宰治「女の決闘」論」『川口短大紀要』20, pp14-15

³ 小堀桂一郎 (1980) 「解説」『歐外選集 第十七巻』岩波書店, p. 340.

⁴ 金澤庄三郎 (1911) 『辭林』三省堂書店.

⁵ 新村出 (1969) 『広辞苑 第二版』岩波書店.

⁶ 新村出 (2018) 『広辞苑 第七版』岩波書店.

⁷ 山本明・南原実 (1984) 『現代独和辞典』三修社.

⁸ Haus Freiheit: Biografie Herbert Eulenberg, URL:<https://www.haus-freiheit.de/bioherbert.html> (abgerufen am: 25.08.2021).

⁹ 林尚孝 (2008) 「来日ドイツ人女性はエリーゼ・ヴィーゲルトである--「舞姫事件」考(その2)」『鷗外(82)』森鷗外記念会, pp. 51-66.

¹⁰ Schreiber, Michael (1993): Übersetzung und Bearbeitung. Zur Differenzierung und Abgrenzung des Übersetzungsbegriffs. Tübingen: Narr

¹¹ 山本史郎 (2020) 『翻訳の授業 東京大学最終講義』朝日新聞出版, p. 161.

¹² Jung, Carl Gustav: Gestaltungen des Unbewussten, Zürich, Schweiz: Rascher Verlag, 1950. S5-38, Psychologie Und Dichtung, S. 8.

¹³ Della Thompson, The Concise Oxford Dictionary of Current English (Oxford, New York: Oxford University Press, 1995)

¹⁴ Jung, Carl Gustav: Gestaltungen des Unbewussten, Zürich, Schweiz: Rascher Verlag, 1950. S5-38, Psychologie Und Dichtung, S. 13.

¹⁵ Jung, Carl Gustav: Gestaltungen des Unbewussten, Zürich, Schweiz: Rascher Verlag, 1950. S5-38, Psychologie Und Dichtung, S. 10-11.

¹⁶ C. P. Goodman. (2003) 'The Tacit Dimension' Polanyiana, 2003/1-2, 2003 p. 133

¹⁷ Deutsches Feuerwehr Museum Fulda: Jeder Schuß - ein Russ! Jeder Stoß - ein Franzos! Nun woll' n wir sie mal dreschen! Hatespeech und

Rassismus unter europäischen Nachbarn, Fulda: (2021), S1.

¹⁸ 林尚孝 (2008) 「来日ドイツ人女性エリーゼ・ヴィーゲルトである--「舞姫事件」考(その2)」『鷗外(82)』森鷗外記念会, pp. 51-66.

¹⁹ 長谷川泉 (1966) 「収録作品の解題 一、舞姫」『舞姫・山椒大夫 他四編』旺文社, p. 186.

²⁰ Jung, Carl Gustav: Gestaltungen des Unbewussten, Zürich, Schweiz: Rascher Verlag, 1950. S5-38, Psychologie Und Dichtung, S. 15.

²¹ Jung, Carl Gustav: Gestaltungen des Unbewussten, Zürich, Schweiz: Rascher Verlag, 1950. S5-38, Psychologie Und Dichtung, S. 14.